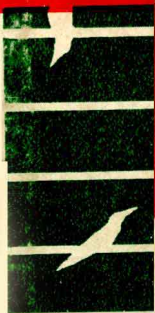


羅陀曼子晶

佐藤春夫





あきこまんだら
晶子曼陀羅

¥. 140

昭和 30 年 5 月 25 日 第 1 刷發行

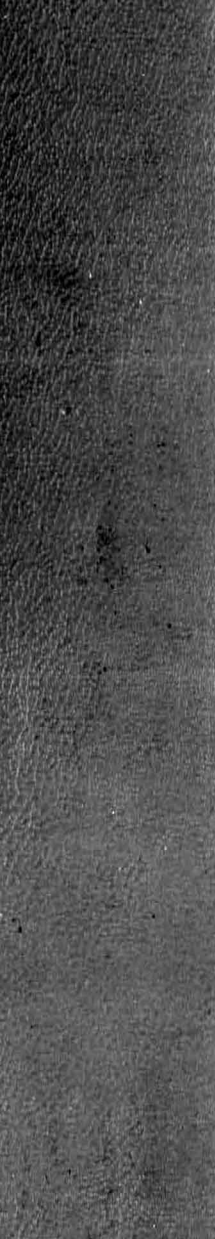
著者 さとう はる を
佐藤 春 夫
發行者 野間 省 一
印刷所 株式會社 技報堂
發行所 株式會社 大日本雄辯會講談社

東京都文京區音羽町 3 の 19
振替 東京 3 9 3 0
電話大塚(94)3101・3111・3121

(落丁本・亂丁本はおとりかえいたします)

(共同製本)







晶子曼陀羅

佐藤春夫

ミリオン・ブックス

裝幀
難波田龍起

晶子曼陀羅自叙

これは勿論、晶子傳ではない。また晶子論でもない。とは云へそれらの要素をも幾分は帯びないではあるまい。しかしその生きた時代の空氣のなかにこの女戀愛詩人の人がらを寫したいといふのが作者の企てたところなのだから、傳や論ではなくむしろ像の方なのである。ところで詩人を描く以上は詩的な作品をといふ念願がパン種の利きすぎたかのやうにふくれ上つて、詩人とはどういふ種類の人間か、詩とは何で、どうして形成するか、それはどう讀み味はふべきか、その他。我が詩に關する一切の管見が期せずしてこの作品で具體化されたかの觀がある。書きながら、必要上多く讀み漁り、讀み耽つた新詩社の詩歌に魅せられて詩魔に憑かれた結果であつたかも知れない。

時にはものがあつて自分のかたはらに來り嘸いてこれを教へ書かせたやうな部分もあつた。これは自分の最初の意圖したとほりのものではない。と云つて、決して別の何物でもない。ただ神の分け前の異常に多い窯變なのである。

それにしても自分の書きたいもの、書くべきものを書いたといふ喜びは、最初に意圖したところを意圖のとほりに書き上げた喜びに優るとも劣るまい。失敗した作だか、成功したのだから今は自分にも判らない。

讀みかへしてみても心にそまぬ節、足りないと思ふ点ももとより無いではないが、暫く發表當初のものに最少限の朱筆を加へてここに上梓した。

この制作に當つて湯淺光雄博士が年來蒐集の資料を惜しみなく提供された上、執筆中終始與へられた聲援に對してこの機に感謝する者である。

昭和甲午九月五日夜

東都目白坂にて

佐藤春夫しるす

目次

第一章	十五の少女……………	一
第二章	父母の家……………	三
第三章	黒き胡蝶……………	三
第四章	鳳小舟……………	四
第五章	「明星」かがやく……………	四
第六章	「東西南北」の人……………	五
第七章	蓮に書く歌……………	七
第八章	妻をめとらば……………	六
第九章	永觀堂の秋……………	七
第十章	みだれ髪……………	一〇
第十一章	魔書出づ……………	一八

第十二章	華頂山の春	一九
第十三章	焰の翅	一四一
第十四章	渦潮の中	一五三
第十五章	黄金向日葵	一六四
第十六章	君死に給ふことなかれ	一七四
第十七章	佳人薄命	一八五
第十八章	夕雲男	一九五
第十九章	魔王と女怪	二〇六
第二十章	海越えて	二一七
第二十一章	三千里外	二二八
第二十二章	流離の女	二三九
附録	ふたなさけ	二五〇

晶子曼陀羅

繪そらごとまことまぼろしうた心

そぞろにつづる晶子まんだら（作者）

第一章 十五の少女 (二―五)

一

「ほう、どなたかと思へば、これはよくこそ。駿河屋さんのいとはん（令嬢）か。何はともあれ、まあお上り。」

と主人の樋口氏の言葉に、小ざつぱりとした荒い久留米の袷に紫縹子の半幅帯を締めた小娘は、無言で一禮すると、既に勝手を知つたもののやうに、すたすたと玄關へ上りこんで、更に座敷の片隅へきちんとひかへると、あとから来て上座についた主人に、あらためていねいな一禮をして、頭を上げるや、

「せんせ、うち學校の小田先生せんせにうかがつたら源氏物語は白樂天の『長恨歌』から出たものやうやつて仰言つたよつて、こちらの先生に『長恨歌』とやらを讀んでいただきたいと思ひ立ちましていきなり上りました。おそれ入りますが、こんな勝手なお願ひ聞いていただけませう

か。」

と、かう切り出されて、當の先生せんせいの樋口氏は心中少し狼狽氣味であつたが、根が正直な人の、すぐありのままを、

「わしは恥づかしながら、實のところ、この年になるまで自分の國のその名高い物語もまだよ
う讀まないので、それと『長恨歌』との比較などはできませんが、唯『長恨歌』を讀んであげる
ぐらゐなことではよろしければ。」

「はい、それで結構でございますが、わたくしにはまだむつかしうございませうね。」

「いやわかるやうに讀んでみて進ぜよう。」

「いいねいに稚兒輪の頭をさげた娘に對し、

「それで鳳ほうさん、あんたはもう源氏をお讀みかの？」

「はい、一昨年あたりから、ほんの少しづつ、なぐさみに湖月抄などを手引に讀んでみてゐま
すけれど、たよらないわかりかたですんで、ようわからんところは學校で小田先生に伺つてみて、
それでもまだしつかりわからんやうなのです。」

「一昨年あたりから？」

と樋口氏はわが耳を疑ひつつ、この娘幾つになつたのであつたか？と思つて、また

「學校は？」

と聞いてみると、女學校は今年本科を卒業して補習科といふのに入つたが、料理や裁縫家政
などといふのでつまらないから、またこちらの塾へ通ひたくなつて來たといふだけで、一昨年

の年齢はまだ判明せぬが、とにかくまだ子供。樋口氏はこの子供の早熟の才と好學心とに且つ驚き、且つわが身の菲才を今更に愧ぢた。

慰みに讀み出して投げ出しもせず、兄か父かに聞いたらうが、その注釋で本氣に讀みはじめ、今度は『長恨歌』まで讀み及して見たいとは奇特な心と云ふか、後生可畏とはこの事であらうか。それにしてもこれが男の子ではなく、ましてあきうどの女で、豪家とは云へ、親にも當人にも氣の毒なこと、文明開化の當今は知らず、古來、女子の才あるは禍とやら、と樋口氏は心ありげにその小娘を見かへりつつ、襖の引手に手をかけて、

「では、ちよつとお待ち、本をあげる。」
と云ひのこして、次の間に入つて行つた。

二

名ばかりの座敷は、猫の額ほどの空地に萩や山吹のほか樹もないのに而した八疊で、授業場と客間とを兼ね、夜は夫妻の寢室ともなる。襖をあげて入つた次の間の六疊といふのは納戸とも書齋ともまた臺所に近いあたりは茶の間を兼ね、同時に細君が内職のお針場でもあるが、老妻は老眼にこの窓の下の方暗さを歎じて時には八疊へも進出する。僅にこの二間のほかは玄關の二疊。これが町の漢學者樋口氏の知新塾で、近くに芝居や勸工場もあつて堺の中心部の一隅とは云へ、宿院（といふのは住吉神社のお旅所）と寺町との中間のさびれた裏町のそれも占びた二軒長屋といふでもなく、家主が微祿して大きな邸の裏口の一部を仕切り便所をくつつけ

二疊の入口をつぎ足して貸家としたといふ落ちつかぬ構へである。

樋口氏は冬は古布子、夏は洗ひざらしを肩にかけて、この古家をも身の分にふさはしい寓居としてゐる。彼はもと伊勢の人とも和歌山とも兩方に云ふのを人は怪しむが、伊勢の松阪は和歌山藩の飛地だからどちらも本當で、まして彼は少年の日、志を立てて寄らば大樹の蔭と南葵徳川氏の御城下、和歌山に出て藩の儒學に學ぶうち忽ち維新の變に遭つて學も半で廢し、新時代に處する道を求めて大阪に出たが、當時、堺縣に教育と工業との大に興ると見えた時、その古い土地柄と新しい勢とに誘はれて、この土地の小學校に教職を望んでありつけず、さらばと紡績と緞通會社とに書記か會計にでもとの望も他郷人の身元の明かでないのは困ると採用にならない。路頭に迷ふ一步手前を私塾でもはじめて見たらと云ふ人があつて、子弟を塾に通はせるゆとりのある良家の多いあたりをと求めて、此處に落ちついたのは、も早六七年も前であつたらう。

當初から通つて論語の素讀そどくなどを授けた九つの幼女が、今は女學校を出て補習科に入り、當時は髪も短かつた男姿が昔の筒袖を脱いで紫繻子の帯に稚兒輪の小娘となり、ひとりで源氏物語を読み長恨歌をと云ひ出したのである。歲月人を待たず、志蹉跎さだたる白髪の歎は机邊の塵に埋もれた藏書の乏しさにも見出される。一ころは中等教員の國漢の檢定試験にでもと意氣込んで買ひ蓄へた書物も何時しか空しく散じて、今は賣れ残つてゐるうちの一冊に和刻本の『長恨歌』のあつたのを取り出して砂ぼこりをはたきはたき出て、座にかへり、

「本はこれです。お持ちになつて下讀みのつもりで淨寫してお置きなされ。寫本で讀んであげ

ます——少し長いから寫すに骨は折れませうが。」

押し戴いて抱き歸り、以前通ひ慣れた宿院小學校の前を運動場の大藤棚を横に見て二三町出ると賑やかな大道の通は南北へ一筋に市を貫いて大阪から和歌山への國道を北に淺香山の丘。妙國寺のと開口神社のと二つ並んだ三重の塔、それよりも一きは高い大樟をどんよりと花ぐもりの鈍い日ざしのなかに見ながら小娘は甲斐町のつつきの東北の角店に本家駿河屋出店、御菓子司所、煉羊羹所などの暖簾のかかつた傍の住居の入口をすべりのいい格子戸をあけて入つて行つた。

三

この朝、満ち潮の高師の濱、住の江、ちぬの海、堺、岸和田、住吉、濱寺の一帶は海も陸も降りこめた春雨に、海も空も銀ねずみであつた。

堺の大道、甲斐町の駿河屋では二階の天井の低い一室で、召使らがしようとはんと呼び慣はしたこの家の三番娘が、土佐半紙をひろげて『長恨歌』の寫本に熱中してゐた。

元來、鳳晶子は筆名で、本姓は鳳、名もしようだから、その本名に上方言葉で令嬢をいふいとほんのいを省略したとはんをくつつけてしようとはんといふ敬愛稱ができてゐた。

靜かな春雨に市中の物音もなごみ、こんな仕事には氣が散らない。また本には返り點があり、白樂天の美しい詩句もぼんやりとはわかり面白げなとしようとはんは興に乗る寫本の筆もはかどつてはゐるが、かう一日中部屋にこもつてそれにばかりかかりかか入りつてゐたのでは、このごろ